

「ソダタキ・タタキ」管見

福田良輔

一

青山に 日が隠らば ぬばたまの 夜は出でなむ 朝日の
 多岐栄え来て 持綱の 白き腕 沫雪の 若やる胸を 曾
 陀多岐 多岐麻那賀理 真玉手 玉手さし枕き 百長に
 寝は寝さむを あやに な恋ひ聞こし 八千矛の 神の命 事
 の語り事も 是をば

右の歌謡が、古事記上巻の八千矛の神と沼河姫との唱和の神歌に
 おける、姫の和えられた第二番目の歌であることは、周知の通りで
 ある。そして、八千矛の神の嫡后須勢理姫が八千矛の神の歌に和え
 られた歌の後節に

綾垣の ふはやが下に 苧衾 柔やが下に 持衾 さやぐ
 が下に 沫雪の 若やる胸を 持綱の 白き腕 曾陀多
 岐 多岐麻那賀理 真玉手 玉手さし枕き 百長に 寝を
 し寝せ 豊御酒 奉らせ

という歌詞が見えていることも周知の通りである。ところで、右の

歌詞の中の「曾陀多岐 多岐麻那賀理」の語義に諸説があり、い
 まだ定説がないことも、いうまでもない。以下、「曾陀多岐」につ
 いて私見を述べ、先学諸賢の御批判をお願いする。

従来の諸説を羅列し批判することは省略し、私見を述べることに
 必要な説だけに触れることとする。

最も注目すべき説は、春日政治先生の『「曾陀多岐」考』である
 う。お説を要約すると次のようになる。石山寺藏の天安二年（一
 五一八）加点の大智度論卷第二に見える「刮刮」は「ソダタキノゴ
 フ」と訓ぜられるものであり、その「刮刮」は慧林音義の道地經の
 部に見えて、註に「字書云刮亦刮也」とあり、また同音義阿育王經
 の部に「搔刮鄭注禮記、刷身爾雅刷」とある。また、玉篇今に「刮
 也、刷所刮切、刷身爾雅刷」とある故、刷はノゴフと訓むことができ、刮は摩也
 とある故、ナヅ・スルの義にとるべきである。現に聖語藏御本唐写
 四分律の古点に「應刮」^{五十}の刮字にナツへと仮名が付けてあるの
 は、ナヅベシと訓んだもので、そのシが省かれたものである。した
 がつて、刮字を訓じたソダタキという語は、ナデル又はサスル・ナ
 スル義、若しくはそれに類する動作と解すべく、「曾陀多岐」を

「抱ク」意味にとる説は成立しない。なお、「曾」は乙類であるから、乙類である「背」、若しくは乙類である擬声のソトのソと解することは許される（「国語叢考」所収）。

このお説に対して、大坪併治氏は、春日先生が「刮刷」を「ソダタキノゴフ」と訓まれたのは見誤りであつて、「ハタケノゴフ」と訓むべきもののようであり、したがつて古事記の「ソダタク」とは無関係であり、「ソダタク」は依然として語義不明であると述べられた（「国語学」第二十八号所載『春日政治博士著「古訓点の研究について」』）。

肝心の石山寺藏「大智度論」天安点の問題になつているところを調べたわけではなく、それに点本の知識に乏しい筆者であつてみれば、両説に言及する資格を持たないのである。しかし、両説とは無関係に、古事記の右の「ソダタキ」の「タタキ」には、春日先生のお説のように「撫でる」意味があるように思われるのである。

二

沼河姫・須勢理姫の歌共に「曾多陀岐 多多岐麻那質理」とあるから、「ソダタキ」は「ソ」と「ダタキ」との二つの結合単位に分解すべきものであり、「ダタキ」は「ソ」と合成語を作ることにより連濁現象が生じたものであり、したがつて直下の「タタキ」と同語であることには異論はなからう。しかして、「ソダタキ」の意味には、強調の意味を表わす接頭辞「ソ」に「叩キ」が付いたものとする説、「背手^{そだた}抱き」とする説、「ソ」は、「素手」「素焼」「素浪人」などの「ス」と同じく、「素肌」即ち「まる裸」のままで抱

く意とする説、「ソ（徐）ト（助詞）ウダキ（抱）の連約か」とする説などがある。最近では、土橋寛氏は春日先生のお説に関して、『次の「真玉手 玉手さし纏き」と比較してみると、対句であるこの句のソダタキはタタキと同語と考えねばならぬから、タタキも撫でる意であるということが説明されないと、十分でない。中略。現在のところでは「素手抱き 手抱き（言別）」とする説に従いたい（岩波書店・日本古典文学大系の「古代」）と述べて、橋守部の説に従っている。拙文において、土橋氏が云われるように、「タタキ」が「撫でる」意味を有することを証明することができれば望外である。

結論を申すと、「撃」「殴」「拍」「擣」等の漢字の義に相当する、四段活用動詞「タタク」のほか、「擁」「撫」等の漢字の義に相当する、同じく四段活用動詞「タタク」という語が、当時存在していたと思われるのである。平安末期から鎌倉初期の頃までに成立したと推定されている「伊呂波字類抄」に見える「撫」「擁」には、諸巻を通じて次のような訓が付されている。

撫	トル	ヲサフ	ヨル	タタク	ナツ	ノル	ヤスシ
擁	トル	タスク	タタク	オホウ	マホル	スヘテ	（以上「古

字書綜合索引」上巻参照） 圏点は筆者が付けたもの、以下同じ。

また、鎌倉時代初期の頃までには成立していたと推定されている「字鏡集」巻十二に見える「撫」及び「擁」には、次のような訓が付されている。

撫 ナツ モ(シ) ム ミル ウツ モテナシ ヨル ヒク モ
ツ ノル トル タモツ ラ(サ) サフ ヤスム ヤスシ オ
(ヲ) ソシ カイナツ(ツク) モテアソフ (タ、ハク) (カ
ク)

括弧の中は、異本による相違を示すものであり、「タ、ハク」は応永本にのみある訓である。

擁 スヘテ タ、グ (ムカフ) カク(タ) ム フサク (マ
ホル) (ワラ) ヲサフ ノコフ (ムクル) タスク (キ
サム) サフ トル トラフ ウタク(ツ) ト、ム キカム
ヲホキナリ (モトオル) (カラ) (メクル) (ヲホフ)
(コホル)

「中華大字典」を見るに、「撫」「擁」の二字にはいずれも、「撃・歐・打・扣・拍・敲・擣・叩」等の漢字の義は見出されない。

「撫」は「中華大字典」には

(1) 安也、(2) 循也、(3) 拊也、(4) 敷也、敷手以拍之也、(5) 慰也、(6) 定也、(7) 厚也、(8) 有也、(9) 巡也、(10) 持也、(11) 手按也、(12) 猶據也、(13) 覽也、(14) 掩也、(15) 抵也、(16) 援也、(17) 拾也、(18) 存恤也、(19) 案止也、(20) 疾也、(21) 撫掩、猶撫拍、謂慰卹也。〔爾雅釈訓〕撫掩也。(22) 撫拍相親狎也。

とあり、「擁」は

(1) 本作擁、〔説文〕摠抱也、(2) 持也、(3) 護也、(4) 羣從也、(5) 翁也、翁撫之也、(6) 猶障也、(7) 猶壅也、(8) 煩擁也、(9) 通甕、載也、(10) 通雍、祐也、又集也、(11) 出而道留謂之擁、(12) 擁腫、朴也、(13) 擁劍、蟹屬。

とあり、別に「遮也」とある。したがって、「伊呂波字類抄」及び「字鏡集」に「撫」を「タ、ハク」と訓んでいるのは、手で撫でて、慰めることを意味するからであらう。もつとも、この訓は、寛元本・白川本には見えず、応永本だけに見えるが、前記の如く「伊呂波字類抄」に、やはり「撫」を「タ、ハク」と訓んでいることと対比すれば、必ずしも後人の書き入れとも思われず、むしろ原本にあつたものかも知れない。「擁」を「タ、ハク」と訓んだのも、両手で掩うように撫でることを意味して、訓んだのであらう。さらに、「類聚名義抄」観智院本・佛部・下本・五七頁に見える「拱」字には、

コマヌク アキラカナリ ノソム マキル ウタク。タムタク。タ、ハク トル

の訓が付けられている。「ウダク」「タムダク」の下に続いている「タタク」は、「ウダク」「タムダク」などの類語と見られる。

「字鏡集」及び「伊呂波字類抄」が「撫」「擁」をいずれも「タタク」と訓み、「類聚名義抄」が「拱」を「タタク」と訓んでいるが、これらの「タタク」は、現代語の「タタク」という動詞が意味する「人をたたく」「太鼓をたたく」「戸をたたく」「手をたたく」「石橋をたたく」「口をたたく」などの「たたく」が意味する「なぐる」「うつ」の意味はないことがわかる。「字鏡集」「伊呂波字類抄」の「撫」「擁」にも、「類聚名義抄」の「拱」にも、「撃・殴・打・敲」等の意味の「タタク」の類語が訓に全く見えていないのである。したがって、「撫・擁・拱」の訓に見える「タタク」は、「ウダク」「タムダク」等の類語で、前述の如き意味を表わす動詞と見られるのである。

三

「ウダク」「タムダク」のうち、「ウダク」は、万葉集卷十四東歌の上野国歌に

三四〇四 上毛野安蘇かみつけのあそのま麻群そむら可伎武太伎かきむだきぬ寝れど飽あかぬをあどか吾あがせむ

東歌の上野国の民謡であるから、「ムダキ」は方言とも見られるが、これなどはむしろ古形を保存している事例と見るべきであろう。すでに春日政治先生が述べられたのであるが、奈良時代末期のものと推定されている「新訳華嚴經音義私記」にも「牟太久」とある。しかるに、日本霊異記には「于田支」があり、奈良時代の「ムダキ」は、春日先生によれば、平安時代の中期末（寛仁）頃までには、「ムダク→ウダク→イダク→ダク」の順序で変化して行つたということである（「古訓点の研究」一二―三頁）。云うまでもないが、「ダク」の新しい形が現われても、従来の「ウダク」が広く用いられていたであろう。それにしても、「類聚名義抄」の「タムダク」は奈良時代からのものである。とすれば、万葉卷六の九七三の長歌に見える「手抱而我われはいまさむ」、同じく卷十九の四二五四の長歌に見える「手拱而事無ことき御代みよと」は、「タウダキテ」の訓よりも「タムダキテ」の訓の方が妥当であろう。「類聚名義抄」の訓の「タムダキ」が奈良時代からの語であることは間違いあるまいから、同じ漢字に同一人によつて附訓された「タ、ク」も奈良時代からの語であるという可能性も十分あるわけである。つま

り、類聚名義抄に類語として共存していた「タムダク」と「タタク」とは、すでに奈良時代に類語として共存していたと推定し得る可能性は、十分に見出されるのである。

ところで、奈良時代の「タムダク」は、「両手を組んで何もしないでいる」意味であるが、奈良時代の「タ、ク」も、平安末期から鎌倉初期頃にかけて成立したと思われる「類聚名義抄」「伊呂波字類抄」「字鏡集」の諸字書における「撫」「擁」「拱」等の漢字に付された諸訓の対比から前に決定したような意味と同じ意味を有していたと思われる。とすると、即ち奈良時代に「タムダク」と共存していた「タ、ク」が「両手で掩うように撫でる（愛撫する）」ことを意味する動詞であるとなると、古事記の沼河姫及び須勢理姫の唱和の歌の「ソダタキ タ、キマナガリ」の「タ、キ」は、同語の連用形であることと見ることができよう。「タ、キ」をこのような意味に解することによつて、沼河姫の歌の「沫雪の若やる胸を、ソダタキ、タタキまな拔ひがり、真玉手、玉手さし枕まき」の描写も生き生きとして来るのである。

四

古事記の「タ、キマナガリ」の「タ、キ」を「手抱たむだき」の縮約形と解する説は、次のような問に答えなくてはならない。全くの同語の原形と縮約形が同時に存在している理由。しかも「手抱たむだく」は「両手を組んで何もしないでいること」を意味しているとのことであるから、「タ、キマナガリ」の解釈としては適切とは云えないし、

意義の分化を説明しなくてはならないこと。奈良時代の頃までは、「ムダク」であつて、ムダク√ウダク√イダク√ダクと変化して、「ダク」が現われたのは平安中期の末頃であり、平安末期から鎌倉初期頃までは「タムダク」が存在していたことは確かであるから、奈良時代に「タムダク」の縮約形「タ、ク」がすでに生じていたと見ることは不自然であること。「ムダク」は奈良時代までは、前出のように「武太使」「牟太久」で、濁音「太」であるのに対し、「タ、キ」の下「タ」は、「多多岐」と二例とも清音「多」で表現され、「ソダタキ」の二例も、下のタは「曾陀多岐」といづれも清音「多」で表記されており、書紀の継体紀の歌謡にも「多多企阿藏播梨」と清音で表記されてあるが、もし「タ、キ」が「タムダク」の縮約形ならば、少くとも「タ、キ」と清音で表記されないで、「タダキ」と濁音を取るはずである。以上の問に対して、「タ、キ」を「タムダク」の縮約形と見る説は答えなくてはならない。したがって、「タウダキ」の縮約形とする説は否定されるのである。

したがって、「タタク」は、現代語の「さすり撫でする」に近い意味であろうが、語源は今のところ不明と見た方が安全であろう。強いて私案を述べれば、「タタク」を「タ（手）」と「タク」との合成語であるとすれば、「タク」は、「トク（溶・解）」などと語源を同じうするものであり、「トク (toku)」のōとaとは古代日本語において母音交替の法則があるので、母音が交替することによつて、語が分派したものと思われる。万葉集に散見する「髪タク」の「タク」は、「束ねる」^{たば}意味の四段活動詞と普通には解されているが、松岡静雄氏の説のように、「調髪する」意味であつて、「タク」

の原義は、手を働かせることを意味していたものであろう（「日本古語辞典」三二二頁）。

万葉集卷十の二一一三の歌の初句、二句には誤字説などもあつて、難訓の一つである。

手寸十名相殖之名著く出で見ればやどの早萩咲きにけるかも
初句「手寸十名相」を誤字があるものとして、「手もすまに」と訓む説もあるが、誤字説をとらないで、武田祐吉博士のように、古事記下巻の雄略天皇御製のなかに「白栲の衣手岐蘇那布（着備ふ）」の「ソナフ」と対照して、「手寸十名相」は「タキシナヒ」と訓み、「タキ」は前述の「タキ」と同語で、「手を働かせる」意味で、「タキシナヒ」は手を働かせて調える（整備する）意味と解すべきであらう。

したがって、「タタク」は「手」と手を働かす意味の四段活動詞「タク」との合成語であつて、「手を働かせ（つづけ）る」ことを意味するものであり、「手抱く」とは意味を異にする動詞と解すべきである。とすると、「タタキマナガリ」の「タ、キ」は「手を働かせ（つづけ）る」という意で、「撫で（つづけ）る」ことを意味したのであらう。

しかして、「ソダタキ」の「ソ」は乙類「曾」であるから、従来乙類で表される「背」及び擬声・擬音・擬貌の「ソ」などが比定されているが、擬音と解して、撫でる際に起る音を表わしたもので、「ソダタキ」は「押しつけるように強く撫でること」を意味するものであろう。

現代語の「たたく」と語源を同じくするか否かは不明であるが、

とにかく奈良時代に「手抱く」^{たむだ}と前述のような意味を表わす「タタク」という四段活動詞が共存していたことが考えられる。

「打・撃・毆・敲……」等の意味の「タタク」と語形・活用共に等しくするために、意味だけを異にする異語の、「撫でる」意味の「タタク」の存在に気付くことが妨げられたのである。

「撫でる」意味の「タタク」の語源は、全く試案の域を出ないものとして披露したまでであつて、先学諸賢の叱正を仰ぐことができれば幸いである。

—九州大学教授—